

博物學上から眺めた我郷土の迷信

和

田

千

藏

迷信とは現代文化の中心をなす科學的眞理と一致しない舊來の信仰乃至慣習を謂ふのであるが、これを具體的に云ふならば未開社會に於ける非合理的な恐怖から醸された奇態な宗教信仰や、これと相關聯した呪術的儀式等は現代の合理化された宗教思想から見て迷信と取扱はれる、人類學的に云ふと迷信は人類の遺物 (The Relic) と考へられてゐる、人類は太古に於て猛獸毒蛇等の危害をうけこれと闘を續けてゐた爲に、一方では動物を畏れこれを尊敬する様になり、遂には鬼神として祀りまた神佛や菩薩や惡魔の仲間となつて使はれたと考へる様になつたものと思はれる。迷信はその本質からいつて非合理的の信仰を主とするものゝ様に考へられるが、文化合理的宗教といふ中にも非合理的な要素が多分に含んでゐるので、迷信としての本質を測る尺度は容易に決定されない様である。

我郷土に流布してゐる迷信は各方面から漁つてみると實に數百項に達してゐるが、これを全國的に分布狀況を調べてみると南方から移入されたものも尠くない、尤もみちのくの端國であるから南方文化の進入と共に新迷信も多數となり、或は藥用、衛生方面に或は神佛信仰乃至は産業方面に迄諸迷信を加味して現今に至つたのである。私はこれから津輕地方を中心とした博物學上から見た郷土迷信の主なるものを極簡單に述べて見ます。

(一) 神使として迷信

全國的に見ると神の使ひ者とされてゐるのは南方熊楠氏によると、奈良宮島の猿と鹿、鳥海山の片目のカジカ魚、伊豆三島の神の鰻である、我郷土では八戸市蕪島のウミネコ、東津輕郡小湊町淺所のハクテウ、南津輕郡猿賀神社のウとサギを神の使姫と崇め、殺生は勿論生存上に不安を與へないことに努めてゐる、八戸附近ではウミネコを殺すと漁業上難破、不漁の害をうくると云ふので、青年團が極力監視してゐる。小湊附近ではハクテウの肉を喰ふものは癩病にかかるし、捕つたものは一生不吉の身で終ると信じこの精神から古來雷電神社境内に白鳥塚と名づくるハクテウの墓地を設け、もしや沿岸で負傷したハクテウでも見つかつたら直ちに介抱しそれでも斃れたならば神式による埋葬式をハクテウ塚で行ふのである。又猿賀村ではウとサギに對する信仰強く、ウとサギを連ねてウサギ(兎)とよび村民は兎の肉迄喰はない、即ち肉食を禁斷してゐる、それで養鶏の産物たる卵は賣つてもその金は乞食にやつて自分等が使はないと云ふ風になつてゐます。これ等迷信の由來は複雑であるが何れもこれ等動物の恩恵を直接又は間接に人民が蒙つたに相違ないと信じます。かかる迷信でも現代思想に照してみると實にうるはしい事で、鳥獸保護の制度

上からみては誠に模範的であると云ふので燕島のウミネコ蕃殖地と小湊の白鳥渡來地は既に天然紀念物と指定されてゐます。猿賀神社のウとサギも早晚同様に指定されることに運ばれてゐます、これ等は郷土迷信から出來た生物愛護精神涵養の模範と云ふべきである。この他に鳩即ちドバトは八幡様の御使者であるから、これを捕つた者は必ず諸事不成功で終ると信じ殺すものは少なく、自家に多數來集することを吉事として歡迎してゐる傾向がある。尙近時は佛法僧の鳴聲を聞くと佛教上の利益があるとして、別の鳥即ちオホコノハヅク（方言ミミヅグ）の鳴聲を聞き、佛法僧の聲と迷信してゐるものも續々新聞で見受けてゐます。

(二) 衛生上の迷信

衛生とは間接に人體の健康を保全する仕事を云ふのである（直接に健康を保全するのは養生）これに就ても中々澤山の迷信があるので、郷土迷信中この種の迷信が一番多い様であるから、博物學上から見たこの主な迷信ばかりをあげることに致します。

- (一) 癩病患者は日蓮宗を信仰すると治るし、一家に病人多い時にも同様とされてゐる。
- (二) 四十二歳の男子は芹を喰ふと死ぬ。
- (三) 傳染病の家を訪問する際に唐辛、ニンニクを袂に入れ

て行くと安全だ。

(四)

漆にかぶれる人は誤て漆に觸れた時俺がウルシニに負けない様にと唾液を三回トツ／＼と吐きかける。或はウルシト兄弟分になるといふので、御神酒を漆樹の下で呑み合ひ漆に献盃の儀で一盃を根元に注ぎその残りを又自分がのむので所謂盃を漆殿と交換するのである。

(五)

六道地藏様に手向けた箸で疣をこすり、その箸を背後に捨て後向せずには歸るとイボがとれる。

(六)(七)

蛇の蛻や茄子の蒂でイボをこすると疣がとれると。

・宇蘭盆の迎火の跡で焼いた御飯を喰べるとムシバがなほる。

(八)

マムシ（方言クソヘビ）と毛虫（方言ギヤアダガ）に指させば指がくさる、誤て指さした時には指先を多の人に七回切る眞似をして貰ふ。

(九)

桐の棒で殴られると全身の骨が痛む、桐樹からおちても全身がいたむ。

(十)

カラスの啼聲を眞似ると口角に濕疹（方言クサガサ、クデガサ）が出来る。

(十一)

犬と夫婦になれば癩病がなほる。

鳥の肺臓（方言セワダ）とカニの鰓（方言サブキ）を喰べると腹痛を催す。

(十三)

眼にゴミがはいった時われのまなこにごみあはいつたばゞ（老母）来て箒で掃いでくれ、トツト、／＼／＼と三回唾液を吐く。

冬至に南瓜を喰ふと中風にかゝらない。

五月節句にホドイモを喰べないと蛆になる。

ナマコを喰ふと視力がよくなつてナマコの糞分丈向ふがはつきり見ゆる（漁師間）。

妻が妊娠中に夫が病氣にかゝるとなほりにくい。給仕人をするとか夫が重病にかゝる。

冬の間懷妊して春又は夏に生れた子は利巧だ。

女が兎肉を喰べると兎口又三ツ口（方言エグチ）の子を産む。

屠夫（方言テラノカクヂ）と犬殺は不具の子を産む。

鶏肉屋の主人が頸がくさる（鶏を屠るに頸をしめて殺すから）。

禪を木灰で女に洗濯して貰うと陰萎になる。

雙子の男女同志が夫婦になると金満家になる。

子供等が乳歯が抜けた際その歯をネズミの歯と交換し立派な歯を生やしたいといふので、その歯を床下又は家の隅に投げる、南部地方では上顎の歯を屋根に下顎の歯は床下になげる。

ホウノキのシヤモジを使うと死ぬ。

博物學上から眺めた我郷土の迷信

(二)(二)

ネズミを頭にあげると白髪になる。
住宅内に葡萄を植ゑると家内に眼病者が出来る（これは相當事實の點を私も握てゐる）

心中した者が生れ返ると男女の雙生子フタゴになる。

アラバト（方言マヲドリ）の姿を見ると必ず死ぬ。

ホウヅキを家敷内に植ゑれば主人の首を狙ふ。

アナグマ(方言マミ)の趾指端でシモヤフを撫でると
よくなほる。

猫を殺すと七代たゞられる。

葬式の際その家に病人があれば必ず死ぬ。

美食をした夢を見ると必ず胃腸を害する。

双子栗とか二重卵黃卵（一卵に二卵黃あるもの）を女が喰へば雙生兒を生む。

大公孫樹の垂枝（方言チ、）をなでると乳の乏しい人は

出て来る。

百日咳はスルメを首に捲けばなほる。
ホウキ

煙草にあてられた時籐を枕にせばなほる。
長座の痺れは額に人字（南部）又は十字（津輕）を書
けばなほる。

舊正月十六日にヨモギモチを喰ひば灸キウをすゑる必要がない。

(四) (四)(元)(天)

(三) (三)(五)(四)(三)

(三)(三)(元)(元)

(二)(二)

(四)(四)(四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四)

産前産後の血の道に苦しむ人は蘆毛馬アシガウの肉を喰ふ。
妊婦が火事を見ると赤痣アカイの子を産む。

牛馬のたづなをまだくと妊婦が難産する、又青年は成功しない。

土用中に下水をこぎ冬至の日に雪を蹴足ケンソクでこけば凍傷シモヤケにかゝらない。

雞卵のケヤラザ(ツナギ)に毒があるからこれを捨てて發狂性精神病にかゝると狐が憑いたと云ふ、眼の腫孔が狐のそれによく似てゐるし時には狐の様な聲を發するからだ。

よくあぶれない餅を喰ふとハレモノ(方言ネゴモノ)がでる生餅を喰ふとハラムシ(蛔虫)が生く。

生米を喰ふと黄痘にかゝる。風邪の時トロ、飯を喰ふものでない毛穴が塞がる。

佛前に手向けた飯を山の仕事に行く人に喰はせると怪我をする。

四月四日と四月二日に結婚するものでない。
五月節句に神様に手向けたショウブを床の下におけば盗汗ヌクミ(方言ネアセ)がなほる。

アマガヘルの生きたものを丸呑みせばニキビがなはるし胃病もなほる。

山野に行て獸類の骨骼を見ると親子に別れるから、こ

(四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四) (四)(四)

の時親にも子にも別れない様にと唾三回トツト、ノノと吐出す。

緋鯉を喰ふと癩病(方言ダシ)になる。
土用の丑の日にウの字のつくものを喰ふと中風にかゝらない、ウナギ、ウシ(牛肉)、ウドン、ウメボシ等の様なもの。

蛙の尿が眼にはいると眼がつぶれる。
キツ、キ(方言ケラツ、キ)の嘴で痛んでゐるムシバをつまればすぐなほる。

子供がミ、ズに放尿すると亀頭がはれる。
山で一尾だけとつた雑魚をそこで煮て喰ふな、無限に水を呑みたくなつて遂に死ぬ。

深高山の湧泉(方言シバコ)に顔差込んで口呑みするとカゲ(ハリガネムシの方言)が腹に宿つて死ぬ。

ノイバラ(方言バラ)の花が咲く迄水浴するものでない、これにそむくとアカハラ(赤痢の方言)にかゝる

ウヅラの聲を聞いてゐれば中風にかゝらない。ウソの聲を聞くとロウサウ(肺病の方言)にかゝる。

横臥して九字(眞言宗の僧や修驗道の山伏などが惡魔怨敵を退散させ吾身を護る爲の禁呪の秘法、口裡に「臨兵闘者皆陣列在前の九字」を唱へながら空間に劍又は双物時により潔めた指頭で横縦交互に九畫を線的に描

(空) くこと)をきると臓腑が切れる。

下北郡佛ヶ浦の極樂濱の白砂を自家に持運ぶ時は、四邊海上は著しく荒れ加之持運んだ人が死ぬ。

キジの肉を喰うと三年前の古傷が再發する。

恐山に夫婦揃で参詣すると妻が死ぬ。

舊曆七月七日には七度赤飯を喰べ七度水浴すると無病健體となる。

(充) 土用にはひつたらニラを食べるなハンメウと云ふ毒虫がついてゐる。

止めておく。この外たづねるとまだノノ多數出てくるから大體これで

(三) 雑多迷信

(一) 植物と動物とを相手にして色々な迷信を描いてゐるからこれを紹介して將來吾郷土民族風習改善の一資料と致します。

ヘビ、トカゲ、カヘルを殺して腹を上に向けておけば雨が降る。

(二) 蛇を殺してもとどめを刺さないと生きて来る、又蛇の頭を切り放すと臺所の摺鉢に這つて来る。

(三) トカゲ、カナヘビ、モリにかみつかれると雷がなる迄はなしない。

博物學上から眺めた我郷土の迷信

(四) ツバメの巢を破壊するとその家が火災にかゝる(ツバメの喉部が赤色であるから火が出る)。

(五) ツバメが毎年きて巢をつくるのに、その年に限り来ないとその家に何等かの不幸がある(之は相當眞理に近い)。

(六) ツバメは巳の年生れの人が打附けた板には巢をつくらない、又巳の年に出産するものがあるとその年はその家に来ない、もしくは巢を造り始めても御産近づくと何處かに巢を捨てて行く。

(七) 秋桃の枝をたくと翌年ツバメがその家に来ない、又來ても桃の枝をたけば逃けて行くこれは上北郡法奥澤の迷信だが、三戸郡五戸町では桑の枝を焚いても同様の結果が現れるといつてゐる。

(八) 捕てきたカニを逃すと土臺をはさみきりその家を倒すが故生きてるカニは自宅に持てくるものでない。

(九) 舊曆八月十五日になると蚊の口吻が八つに割れて人を螫せなくなる。

(十) カラスが河に集つて水を浴びると雨が降る。

(主) リンダウ(方言マバナ)を養蚕中に持てくると蚕は死ぬ。

虫が最初にその上を歩くと毛虫を恐れ、蛙が先きは渡ると蛙を恐れるのである（南郡竹館村）。

(三) カラスはその年の強風と強雨を豫知するもので、大風のある年には低所に大雨の年には高所に巢を造る。

(四) ナシ、リンゴの花が多く咲く年は凶作だ、之は眞理らしい。

(五) ネズミを鳥鵜^{モテ}で捕そこなつたらジャカウネズミに變り米はジャカウくさくて食べられなくなる。

(六) モグラが地上に出ると御テント様（太陽）に叱られて即死するものだ。

(七) 鼠捕るに上手なネコは何時でも鬚を焼いてゐる。家敷内に桐を植ゑるとその家はそれきりで繁昌しない

(八) 同様にボブラ（方言ライギジュ）を植ゑても屋根より高く伸びると主人に不吉が多くなる。

(九) テン落雷の際塚の中に居ることがあるため雷鳴はこの獸の仕業である、故にテンを雷獸と云ふ。

(十) 日光山椒魚（方言サンセウカジカ）の卵塊を戸和田の餅と名つけ、この澤山産んだ年は豊年であると迷信して熊々山奥の戸和田様に参詣に行く。

(十一) クモ（方言クボ）が夜間爐邊、枕邊に現はれると夜盜が來るとして非常にこれを忌む。

(十二) トンボ（方言ダンブリ）を殺すものは學業不振となり

馬肉を食ふと立身出世しない。

(三) 雷鳴の際桑の枝葉を家の入口、マド等に挿すと落雷しない、同様に屋敷の一角に桑樹を植ゑておく。

(四) 兎は鳥である解剖するとマメ（淋巴球）があるからだ故に一疋といはず一羽と計算す、兎に白をかぶせておいても月夜には逃去る。

(五) 八戸附近では鰻を捕る時妊婦が行くとイワシが眼を赤くして逃げ去る。

(六) ボドイモは蟬に化し、ヤマノイモ（方言ナガイモ）を掘らずにおけば蛇に化す。

(七) 蛙の鳴聲で年の豊凶を豫知する、凶作の年にはキヤクノ（カユ食う）豊作の年にはゴウヒヤウ、ノ（五

依の義で少くも一反歩から五依とれる）と鳴く、之には事實が幾分存在してゐる、キヤク、ノ、ノ、ノと鳴くのはアマガヘルで曇り勝の天候によく啼くからです

ゴウヘヒヤ、ノ、ノ、ノと鳴くのはトノサマガヘルで天氣のよい暖かな日によくなくからだ（附屬小學校山上使丁の談）。

(八) 狐が人に化けてよく人を誑す（方言ダマシ）ものだ、牝馬（方言ダマ）に乗つて行くとか決してだまされぬ。

(九) 狐に神通力があつて人の吉凶をよく判斷してくれる、御稻荷様と信じて神社を建て信仰させてゐる、津輕五

(十) (元) (六)

郡でも西郡の高山三五郎様は最も権力がある。それから夜店からでも稻荷様の人形を買つてくると直ちに魂がはいから、家に入れてから粗末にすると不幸が續き大切にすると又幸福になほる。

(三) 狐の鳴聲で吉凶を判斷すコン、ノ、ノ、ノと鳴けば吉事があるし、グアギヤン、ノ、ノ、ノと鳴くと火事がある。

(三) イヒツナイタチ（一名カセギ）を巫女（方言イダゴ）が米で飼ひくぢよせ（口寄）をろす時に之を使用す。

(三) 青森市附近一里以内に蛇がゐない、これは善知様の命令で一里以内に棲んではならぬと禁じられだからだ。

(三) 寒中の夕方ハイタカ（方言スバメタカ）が雀を掴み行くは餌にするのではなく夜脚を暖めるためである、掴まつた雀は早朝無事で歸される、その雀の逃けて行つた方向の雀は當日必ず捕らない。

(三) 南郡竹館村では馬を山野に使役する際に耳に大鈴子をつけて行く、これは魔の者即トビの聲を馬が聞くと即死するから鈴子の音で聞かせないのだ。

(三) キツ、キ（方言ケラツ、キ）は親不孝者で雀は親孝行物である、昔親が重病にかゝつた時キツ、キは呼出されても今御化粧してから行くと云ふてゐる内に親が死んでしまつた、雀が同じ呼出に對し御齒黒をつけてゐた

博物學上から眺めた我郷土の迷信

最中だつたが、口をよく拭はずに飛出した結果親の死

に目に會ふことが出来た、この事を耳にした御釋迦様はスバメには感心し汝は親孝行者であるから、これから先きは人間の食べる御米を食べても差支ないし、又人家の軒下に棲むことを許された、一方キツ、キは親不孝者と叱られこれから毎日降ても照ても枯木の穴から虫を一萬疋捕ることを命じられた、そこでキツ、キは今の様に羽彩は奇麗であるが、毎晩嘴が痛くて閉口だと泣くものだ、雀の嘴が半分黒く染まつてゐるが大部汚れてゐるのだ、これにつけてムゴ（婿）ネゴ（猫）ケラツ、キ（啄木鳥）は御釋迦様の帳面外れだと笑つてゐる（南郡竹館村唐竹）。

(三) ヤマブキの花をとればとつた人の家の味噌に蛇がはい

(三) る（五戸町）。

(三) 私生子（方言テバナシゴ、アマダゴ、ミナシゴ）は一本橋を渡れない（南郡竹館）。

(三) 蛇とミ、ズとが目と聲と交換した、元は蛇に目がなく美聲を持てゐたがミ、ズは目があつて聲がなかつたから、蛇の聲をミ、ズが貰ひ、ミ、ズの目を蛇にやつたそれでミ、ズがよく流し場の附近で鳴くのであると云ふ（ミ、ズが鳴くといふのはケラと云ふ昆虫の聲だ）。

(三) ハタハタ（鱗）の頭骨の組立は青森産のものは津輕家

(四) の御紋章に秋田産のものは佐竹家の御紋章に似てゐるモズの早鷲ハヤシロにされたドヂヤウは雨にまじつて天から降つてきたものだ。

(四) 雀は協議の結果誰の雛でも捨てられてゐるのを見附けると御互に扶助してやる様になつてゐる。

(四) 雲雀は賭博打で冬土中にをる時鼠とばくちして八百を負けた、所で鼠が借金を返してもまだ受取らない早く返せと催促する、それで春地上に出て地面に居られないで、天空に上つてすまして八百、すましても八百キユー、ノノ(第々)と轉づる。

(四) エチゴウサギ(野兎)が仔を産む時に栗の葉に産めば皮下組織に栗の葉痕、笹の葉に産めば笹の葉痕はついてゐるから、皮をはぐ際注意せば判る(東郡幸畑村附近)。

鷹が家にはいつてくると金持になる。

(四) 猫が顔を洗ふ際耳をこすると晴天になり、ねる時に頸を垂下けると雨が降る猫が秋野山にトンボ(方言ダンブリ)を食ふに行き、歸つてくると「眼やに」が非常についてゐる(本校濱田看護婦)。

(四) 馬の蹄の切片(獸醫が整蹄術を施し削り落した蹄片)を蟻塚に置けば蟻が逃げ去る。

(四) トビの肉は中風、腦病、癲病及び婦人血の道の妙藥なりとせられ、全身の黒焼は中風リウマチス、セキに特効が

ある。

(四) 木炭が爐内でバツノはねる時に、山のことを忘れたかと三回繰返しながら火ばしを爐の中に挿し込むとはねなくなる。この様な郷土迷信がまだノノ澤山あるがこれでやめておきますが、文化の進展と共に逐次正信と一致するものが多くなり、今では中年以下の人では殆んど眼中にない様になつてゐます。茲に於て考へるべき必要の一項が出てくる。迷信をしてゐる間は農村に於ては野荒しの習風も少く惨忍の行動も少かつたがやがて迷信が衰へる様になつてきてからは、思想が一變し色々のあやまつたことばかり多く出る様になりました。それ故に從來流布してゐる迷信の發源をよく調べよく味うてその眞理が奈邊に存在してゐるのかのこと迄調査してから凡ての仕事に取りかゝらねばならないと考へます、決して年寄りの云ふことを一文の價値の無い様に聞捨てるものではない。

(終り)

(昭和九年十一月十一日稿之)

(附) 平内の七不思議(東郡小湊町)

(一) 猫に蜜がつかない

(二) 郷人は落雷に遇はない

(三) 乳穂に蠶蓋をかぶせない

(四) 福嶋の地震知らず

(五) 立石の洞穴

(六) 童子の逆茅

(七) 田澤の化嶋

以上